

りつつ古典名作案内になっている松村由利子の『少年少女のための文学全集があったころ』（人文書院）、自らの子ども時代や研究への道筋を辿りながら、英米児童文学の作家や作品を列記して論じている猪熊葉子の『大人に贈る子ども文学』（岩波書店）、「児童文学の中の子どもと大人」という連載（『こどものしあわせ』をまとめたきこのりこの『ともに見る窓』（本の泉社）なども、ブックガイドとして有用な本になっている。

他にも、著名文化人三十人の選書による『10代のうちに本当に読んでほしい「つの一冊」』（河出書房新社）や、『大人が読みたい絵本500』（サンエムック「男の隠れ家」教育シリーズ 三栄書房）といった文庫やムック本、雑誌の特集でも「人生の色んなことに迷ったら 大人の少年少女文学」〔CREA 二〇一六・二〕や、「率直と希望 いま、YA文学」〔THE BIG ISSUE 日本版 二〇一六・一〇・一〕などがあった。

こうしたブックガイドの出版を振り返って、まず思ったのは、情報への「信頼」が、改めて求められているのではないか、ということだ。IT（情報技術）の進んだ現在、世の中には、本の情報も溢れている。しかし、一方で、ネットの匿名記事やフェイクニュースの責任の問題、広いようで狭いネットワークの偏りなどが、IT時代の弱点として明らかになってきている。そんな中、ブックガイドの多

くは、何より「誰が」選んだのかを前面に押し出す。また、とりあげる本の刊行範囲をあえて限り、歴史的な保証、あるいは逆に新鮮さを加える。本にまつわる活動を示して、ライブ感を与えもする。ブックガイドは今、複数の目を通り、責任の所在も明らかかな本というものの「信頼」を、いっしょに届けようとしているのではないだろうか。

また、これらのブックガイドの多くは、子どもだけでなく大人を、読者に想定している。絵本が今や赤ちゃんから大人までを対象とする一大メディアとなっているのは言うまでもないが、古典名作やYA文学が『CREA』『THE BIG ISSUE』といった一般雑誌で話題となり、猪熊葉子も大人と子どもが共有できる「クロスオーバー・フィクション」足りうる作品を英米児童文学に見ている。きども「子どもと大人の総合体であるこの社会そのものを描くことができる」側面を子どもの本に捉えている。背景には9・11以後、また3・11以後、ますます混迷する生きにくい世界が意識され、その中でなお、希望や幸福を追求し、明日を見て、大丈夫と思える、そういう確かなもの、生きることへの「信頼」が、子どもの本に期待されているのも感じる。

確かな生への「信頼」を「信頼」しうるかたちで届ける本。たくさんのブックガイドの出版は、「子どもの本」の現在の位置づけを、図らずも示しているように思える。